

## さよならハガキ職人

わたしはその少年を「ハガキ職人」と呼んでいた。彼はわたしの傍らで、せっせとハガキを書いていたものだ。

不安定な天気の日が続く冬のことだった。わたしたちは虚脱しきっていた。霜に焼かれた雑草が弱弱しく生い茂っている、くすんだ色の土手の斜面に腰掛けて、そこから目に映るものを何をするでもなく眺めていたのだ。さまざまな高さのビルディングや、色々な色で彩られた屋根の連なりによって組み立てられた街、ほんとうはカラフルな風景なのに曇天のせいで灰色一色に染まってしまった街を、うねうねと曲がりくねりながら流れる川が分断していた。川はひねくれた曲線を描きながら、そのまま空も分断し、風も分断し、しまいにわたしたちまでを分断して、なにもかも四散してしまうのかもしれない。しかし、少なくとも眼に映る限りでは、均衡は保たれているようだった。

ハガキ職人はつたない文字を並べて、ハガキを書き続けていた。あんなにたくさんのハガキを書いていたというのに、彼はちっとも字が上達しないのだった。

### 今日はオーロラが見えました。

彼はちびた二B鉛筆を握りしめ、大きくて不ぞろいな文字をぶっくら棒に書き連ねている。書き終えると、彼は満足気に——と同時に、限りなく不満気に——その紙片を眺め回してから、わたしの手の中に押しこんでくるのだった。

「この嘘つき」とわたし。

「嘘なんてつかないよ」彼は毛糸の帽子を目深にかぶり直し、膝を抱えて背中を丸める。彼はいつも、おかしくなるほど平凡な動作を、おかしくなるほどどこちなく行うのだ。

「どこに出てるのやら」わたしは空を見上げる。垂れ込めた雲の一角が、今にも泣き出しそうな顔つきで風に流されていた。

「そう簡単には見えやしないね」膝に顔を埋めたままで、ハガキ職人はそう言った。

今日も厄日か。わたしは大きく息を吐き、その真っ白なかたまりを空中に浮かべてみる。鉄橋を渡り行く電車の足音が、しんと冷え切った空気をかすかに震わせていた。ともかく冬を越さないとうにもならないね。でも一体何をして季節をやり過ぎすべきなんだろう。アリは地下に貯め込んだご馳走に舌鼓打ちながらダンパに興じ、キリギリスは弦の切れたバイオリンを片手に野垂れ死ぬ、それじゃ、わたしたちは何をすればいいのかな。口には出さずにそう尋ねたら、ハガキ職人は昂然と頭を上げ、ポケットからちびた二B鉛筆を取り出して、またぞろハガキを書き始めた。

わたしはもう一つ、綿菓子のような吐息を空中に浮かべてみる。その向うに、灰色に煙った街が見える。わたしの赤茶けてくしゃくしゃの髪の毛が、川面から吹いてくる風に巻き上げられる。まるで首筋に氷を押し当てられたような風の冷たさに、思わず身震いをする。今日はオーロラが見えました、か。このうそつきめ。

×××××

何もすることがないわりには、何かしなければいけないことはいくらでも在るのだった。わたしは客の少ない中華料理屋で給仕のバイトをしたり、電話越しに聞こえてくる親の小言に適当に相槌を打ったり、赤茶けてくしゃくしゃの髪の毛に櫛を入れて、無理やりに梳いてみたりするのだった（それでもやっぱり、わたしの髪はくしゃくしゃのままだった）。

客の少ない中華料理屋のバイトは、さしてしんどいものではなかった。くしゃくしゃの髪の毛を無造作に束ね、どうしようもなく垢抜けないチェック柄の桃色のエプロンを付けて、お昼どきに常連客の大学生たち相手に油まみれの定食モノを出し、後はのんびりとテレビを見ているだけでよかった。

それにしても、あの男子大学生と言う生き物は、どうやってあんなにがつがつと、信じられない量の食べ物を平らげてしまうのだろう。特に、週に必ず一回はやって来る、トンボ眼鏡のサングラスをかけた人と、こんがりと日焼けした遊び人風の青年の二人組は、胃袋がどうかなっているのかと思うような食欲だ。どうでもいい話を延々としながら、餃子でビールを一本空けて、大盛り中華丼をぺろりと平らげ、肉とキャベツの味噌炒めを追加して、挙句の果てにもう一皿餃子を食べる。彼らは胃袋を甘やかしているのか、それとも痛めつけているのだろうか。

「よくもまあ、そんなに食べられますね」

給仕たるもの、少しは愛想よく接客をしなければ、と思つて話しかけてみたのだが、なんだか妙な悪意のある言葉になつてしまった。しかし、トンボ眼鏡の人と遊び人は可笑しげに笑いながら、

「ひどい言い草だなあ、赤茶毛さん」などと言うばかり。それどころか、更に杏仁豆腐を追加したりする始末。

彼らはわたしのことを『赤茶毛さん』と呼ぶ。わたしの、赤茶けてくしゃくしゃな髪の毛にちなんでひねり出された渾名だ。（わたしはこの渾名を、割と気に入っている。）

食欲の権化のような兄さんたちを置き去りにして、わたしはカウンター席に寄り掛かつてテレビを見ている。「観ている」のではなく「見ている」。見たいもの、知りたいこと、何も無い。ただ、賑やかな音を耳にしていた方が、より静かな気分でいられる気がするのだ。ねえ、赤茶毛さん、追加でトリの唐揚げね、などと誰かが叫んでいる。聞こえない振りをして、わたしは頬杖をついたまま、午後の眠気に柔かく包まれている。

たまにバイトをさぼって、わたしはふいと街へ出てしまう。さぼった処で問題はないのだ、客足の少ない時間帯を選びさえすれば。しかし街へ出たところで、何か面白いことがあるわけでもない。むしろ、ただでさえ面白くない我が日常が余計退屈なものになるぐらいだ。欲しいものも特にないいし、やりたい遊びも特にないい。と言うと、「何て詰らない奴」などと言われるかも知れないが——しばしば実際に言われたこともある——、わたしに言わせれば、退屈することの素晴らしさも知らずに生きている人間の方が、余程詰らない奴だ。

わたしの時間の潰し方と言えば——まずは、客の少ない路面電車に乗ってみること。古びたアルミの弁当箱のような、小ぢんまりとした電車に乗って、大通りを呑気な速度で走るのだ。あの奇妙にノスタルジックな、独特のリズムで揺られていると、とつくに忘れてしまった諸々の重要

時も思い出せるような気がして——あくまで、気がするだけなのだが——なかなか気分のいいものなのだ。

それから環状線に乗って、スモッグ色の空の下をぐるぐると回り続けること。高架橋から俯瞰できるこの街は、せせこましく薄汚れていて、割と乙なものだ。黙々と仕事をこなす郵便配達夫のように、ひたすら街を回り続ける環状線はわたしのお気に入りである。先日、わたしの数少ない友達のうちの一人が、その列車に乗って街を出て行ってしまった。彼は画家だった。しかし彼はこの街にいた間、結局一枚の絵も描き上げることが出来なかった。そして彼はある朝ふと思いつき、列車に乗って街を出て行ってしまったのだった。環状線の線路は閉じた円環のように見えるけれども、何所か遠くの場所に通じる道とも繋がっていたのだと、わたしは彼が居なくなってから初めて気付いたのだった。

そしてもう一つが、土手の斜面に腰かけて、特に何を考えるでもなく呼吸だけして過ごすこと。霜に焼かれた雑草が弱弱しく生い茂っている、くすんだ色の土手の斜面に腰掛けて、そこから目に映るものを何をするでもなく眺めてみるのだ。さまざまな高さのビルディングや、色々な色で彩られた屋根の連なりによって組み立てられた街、ほんとうはカラフルな風景なのに曇天のせいで灰色一色に染まってしまった街を、うねうねと曲がりくねりながら流れる川が分断していた。川はひねくれた曲線を描きながら、そのまま空も分断し、風も分断し、しまいにわたしまでを分断して、なにもかも四散してしまうのかもしれない。しかし、少なくとも眼に映る限りでは、均衡は保たれているようだった。そして、そんな風にわたしが土手から風景を観察していると、決まって出会う奇妙な少年が一人いて、それが例の「ハガキ職人」だったのである。

ハガキ職人も土手を気に入っていたようで、わたしと同じようにしょっちゅう足を運んでいるようだった。彼はズボンが汚れるのも厭わずに斜面に座り込み、せっせとハガキを書いていたのだった。

×××××

「何やってるの？」

わたしは最初、そんな風に彼に話しかけた。

「おねえさんの方こそ、何やってるの？」黙々とハガキを書きながら、彼は無愛想な声で答えた。

「特に何にもしていない」わたしはそう答えた。「で、そっちは？」

「ハガキ書いている」彼はそう答えた。わたしは満足して頷いた。いい回答だ。

わたしが断りなく、勝手に横に座りこんでも、ハガキ職人は少しも気にする素ぶりを見せなかった。彼はハガキを書く邪魔さえされなければ、誰が自分の隣にいても一向に気にしないようだった。わたしはぼかと空を眺め、そして彼は黙々とがきを書き、そして地球は回る。めいめいが、めいめいの仕事に励むのだ。

やがてハガキ職人は、頼みもしていないのにわたしにハガキを押しつけて来て、その文面を読ませるようになった。ハガキに書いてあることは、いつも出鱈目なほら話、うそっぱちばかりだった。

今日ぼくは大きなくじらをつかまえました。くじらはボブという名前です。ボブの口の端からは、

四年前に倒したという大王イカの足がはみ出しています。四年経った今も飲み込み切れていないほど、その大王イカは巨大なのです。

エンパイア・ステイトビルのでっぺんに腰かけて、このハガキを書いています。書き終わったら、飛び降りてしまうつもりです。心配は無用です。ちゃんと大きくてかつこいパラシュートを背負っていますから。パラシュートは、ぼくの好きな蛇の目の模様です。

今日はいい天気だったので、オーロラが見えました。あなたの家からは、見えましたか？

わたしは苦笑いする。つくならもつとましな嘘をつけばいいのに。

「嘘なんかついてない」と、ハガキ職人は躍起になって言い張る。こんな文面じゃ、誰もだませないってば。「別に、誰かをだますためにハガキを書いてるわけじゃない」と彼はぶぜんとした顔つきで言った。

それは本当のようだった。彼はけして嘘つきではなかった——より正確な言い方をすれば、人をだますための嘘はけしてつかなかったのだった。

×××××

ハガキ職人の身の上について、詳しいことは殆ど知らない。親が仕事で外国にいたので、一人暮らしをしているということ。あまり学校には行っていないようであること。暇さえあればハガキを書いていること。判っていることと言えば、それ位のものだ。

こと、年齢に関しては全く予想もつかない。彼は時にはひどく老成しているようにも見え、またある時にはひどく幼くも見えた。当人に聞く気にもならなかった。「坊や、いくつ？」なんて質問は、とてもする気にはなれないものだ。

ハガキ職人は、わたしの知る限りでは二種類のバイトをしていた。一つは新聞配達、もう一つは街頭でのビラ配りである。

あれはいつだったろうか——。東の空が白んでゆく時間に、わたしは二日酔いの頭を出来るかぎり揺らさぬよう慎重な足取りで、なんとも陰気な朝の住宅街を歩いていた。住宅街には同じ形をした家々がえんえんと立ち並んでいる。わたしの踏みしめている街路の急な傾斜が、足にこたえた。顔の上に落ちかかってくる、自分の赤茶けてくしゃくしゃの髪の毛がうっとうしいのだが、それを払うのすらもおっくうだった。なんとも陰気な朝だ、とわたしは痛む頭の中でつぶやいていた。

やはり飲み慣れないお酒なぞ飲むのではなかった。わたしは、トンボ眼鏡の人と遊び人——前にも述べたとおり、わたしが働いている中華料理屋の常連客だ——と一緒に、調子に乗って飲みすぎてしまったのである。

静かな夜だった。トンボ眼鏡の人と遊び人は、追加注文のトリの唐揚げをさかんにビールを飲みながら無駄話していて、わたしはシフトの時間が終わったので帰ろうと身支度をしているところだった。その時、トンボ眼鏡の人がわたしに声を掛けた。「ねえ、赤茶毛さん。もう仕事は終わり？」

「はい」

「帰るの？」

「はい」

「帰ったあとに予定はあるの？」

「なんにもありません」わたしはばか正直な人間らしい。

「じゃあ、一緒に飲もうぜ」遊び人がコップを掲げながら言った。「おごるよ」

わたしは少々面食らったが、この二人は警戒すべきにんげんではないように思えるし、一緒にお酒を飲んでも大丈夫だろう——そう思って、彼らのテーブルに着いた。ところが、その判断は甘かったのだ。確かに、二人はわたしの推測通りの人畜無害な人々だったので、警戒する必要はなかった。しかし、お酒の方はと言うと、十分に警戒すべきだったのだ。

わたしは結局閉店時間まで飲み続けてしまい、すっかり出来上がってしまった。終電はわたしたちを置き去りにしたまま、真夜中の街の中に溶け込んで行ってしまった。仕方ない、始発が来るまでカラオケにでも行って時間をつぶそう、とトンボ眼鏡さんがうれしそうに言った。遊び人もそれに賛成した。わたしもくしゃくしゃの髪の毛をさらにくしゃくしゃに掻きまわしながら、二人のあとについて行った。

さて、どういうわけだかわたしは深夜カラオケに行くと、何とも言えないやり切れない気分になってしまう。盛り上がっていた気分がふと途切れた一瞬になだれ込んでくる、おもたい空気のような疲労感、倦怠感。一体どんな人が出演しているのだろうか、モニターに映っている安っぽいビデオクリップ。そして、不安定な音程で歌われる、一昔前のはやり歌——家で古いCDを引っ張り出してきて聞いた時にわき上がって来る感慨とはまったく異なる、へんな種類のノスタルジィを喚起されて、わたしは思わず水くさいオレンジジュースを一気に飲み干してしまうのだ。

そんな寂漠感に押しつぶされてしまったのだろうか、わたしは歌いながら眠り込んでしまった。次に目が覚めた時には、ものがなくとも悲惨な痛みが、わたしの頭蓋骨の中に住みついてしまっていた。しまった飲みすぎた、わたしは途方に暮れた。

痛みは律儀なリズムを保ったまま、わたしの頭の中で息づいていた。もしかするとわたしの頭は、お寺の鐘つき堂に鐘の代わりにぶら下げられて、小坊主さんに打ち鳴らされているのではないか。痛みをかくぐり、頭の中に映像が浮かんできく。夕暮れ時、山に帰ろうと羽ばたくカラス立ちを横目に、小坊主さんはわたしの頭を打ち鳴らす、くぐもった鐘の音が村に響いてゆく——。そんなわけでわたしは白みかけた空の下、もうすぐ朝が来るというのに、夕暮れ時のまぼろしを見ながら帰途についたのだ。

わたしは危なっかしい足取りで先を急いだ。先を急いだものの、早くは歩けない。急な傾斜のある街路を、わたしはゆっくりと歩いてゆく。視界の両側に、同じ形をした家がいんえんと連なっている。おまけに、赤茶けてくしゃくしゃの髪の毛が、顔の上に落ちかかってくる。なんとも陰気な朝だ、とわたしは痛む頭の中でつぶやいていた。

その時、新聞配達少年がわたしの方に向って走って来るのが見えた。彼は仕事の真っ最中だ。やたらと大きな籠のついた自転車を押しながら——その籠の中には新聞の束が入っている——、少年は街を走り抜けてゆくのだった。それを見て、わたしは「ああ、朝だ」と思った。こみ上げて来るお酒のにおいの中に埋没しながらも、わたしは朝の予感を感じていた。「ASA!」という言葉葉が、割れかけたわたしの頭の中に浮かび上がり、点滅をくり返している。その直後、こっちに

向って来る少年の輪郭をしっかりとわたしの目が捉えた時、その「ASAII」という文字が「HAGAKI!」という文字に変形し、さらにはげしく瞬いた。その新聞配達の少年は、他ならぬあのハガキ職人だった。

わたしは頭を揺らさぬよう気をつけながら、慎重に手を挙げて、ためらいがちに左右に振った。

ハガキ職人は顔を上げて、わたしの姿を認めた。そして一瞬、ぽかんとした顔付きを見せ、すぐいつもの仏頂面になり、ぶつきら棒な会釈を返してきた。「顔色悪い」

「最低の気分」とわたしは答え、顔の上に落ちかかっていた髪の毛をようやくと払いのけた。そして、「新聞配達してるの？」自分の声が頭蓋骨の中で反響しないよう、なるたけ小さな声でそう尋ねた。

「うん。最近始めた」

「どう？」

「うん、忙しい」ハガキ職人はそう言い残し、わたしの横をすり抜けて行つた。相変わらず、無愛想なやつ、とわたしは胸中でつぶやいた（声には出していないはずなのに、何故だか頭蓋骨の中で反響したように思えた）。

ふと足元を見ると、紙切れのようなものが二、三枚落ちていた。彼が落として行つたものだろう。拾い上げると、案の定ハガキだった。

昔ながらの蒸気船の中で、このハガキを書いています。船室には南国のフルーツが山のように積んであって、毎日お腹いっぱい食べています。水夫さんたちとも友達になりました。いい人たちばかりです。蒸気のせいでみんなススだらけになり、お互いの顔を見ては大笑いしています。

わたしは呆れて、少しの間頭の痛みも忘れてしまった。

ひよっとしてハガキ職人は、これを新聞といっしょに郵便受けに投げ込んでいるのではないだろうか――。わたしは彼のでたらめな近況報告を読みながら、そんなことを考えていた。

それから何日かして、わたしは土手でハガキ職人と出会った。彼はいつも通り、草の葉についた露でズボンが濡れるのも厭わずに座り込み、せっせとハガキを書いていた。

「新聞配達、どんな調子なのさ」わたしはそう尋ねた。

「くびになった」

「なんでまた」

「苦情が来た」と彼。「へんなものが一緒に配られて、迷惑だつてさ」

わたしは肩をすくめた。ハガキ職人は涼しい顔でハガキを書き続けていた。

×××××

新聞配達をくびになったハガキ職人がその次にありついた仕事は、ドラッグに関係のあるアルバイトだった。

と言つても、自宅でこっそり大麻を育てて売りさばいたり、LSDを染みこませた新聞紙を隠し持って高飛びしたりといった、そんな仕事ではない。彼の得た仕事というのは、「全品五十パー

セントオフ」だの「ポイント還元セール」だのとポスターカラーの文字で大書きされたカンバンを二枚、からだの前と後ろにぶら下げて薬屋の前をうろうろする、いわゆるところの「サンドイッチマン」というやつだった。ハガキ職人は、とてもかわいらしい——率直に言う、ものすごく間抜けな——三角帽子を頭にかぶり、自分の背丈よりも大きいのではないかと思われるようなカンバン二枚にはさまれて、無愛想に突っ立っているのだった。さらに彼は店長から、ロイヤルゼリー入りのドリンクだの、新発売のめがねクリナーだの、店の売りさばきたい商品の効能を大声で宣伝して回るように言われていたのだが、これには彼はまじめに取り組んでいないようだった。口の中でもごもごと、誰にも聞き取れないような声（自分にすら聞こえないくらいの声）で宣伝文句をつぶやきながら、ハガキ職人はカンバンに挟まれて立ち往生しているのだった。

彼のサンドイッチマン姿を見た時、その出で立ちがあまりに滑稽だったので、わたしは思わず笑ってしまったものだ（そして自分でも驚いた。わたしは滅多に笑わない人間なのだ）。もうすぐ冬がやって来そうである日のことだった。誰もがコートやジャケットのえりを立て、水揚げされてから三日ぐらい経った魚のような顔つきで街を行き交っていた。わたしもその中にまぎれこんで、たぶん陰気な顔つきをして、足早に歩いていった。急に冷え込んできた空気に手の先を焼かれ、ひどく痺れてしまった。わたしはスクランブル交差点に通りかかった。その時通りの向こうに、明らかにこの風景から浮いてしまっている一人の少年を発見した。質感をとまなわなない空気の中、彼の佇まいは何とも奇妙なものに思えた。それがハガキ職人だったのだ。

「人を指差して笑うのはよしなよ」とハガキ職人はふくれっ面で言った。

「別にばかにしてるわけじゃない、むしろ誉めてるくらい」わたしはこみ上げて来る笑いのせいで、少し酔っぱらったようになりながら言った。「こっけい万歳！まじめくさったものなんか、くそくらえ」

「とりあえずこれあげるから、早くどっか行ってよ」そう言って、ハガキ職人はわたしに一枚の紙片をくれた。彼はそれと同じような紙片の束を左手に握りしめていた。きっとビラか、店で使える期間限定のサービス券か何かなだろう、そう思って見てみると、

今日は「さかさまジャングル」に行きました。このジャングルを通過する時には、みんな逆立ち歩きをしなければならぬ決まりなので、この名で呼ばれているのです。分け入って行くと、ぼくたち人間だけでなく、途中で出会った小猿やチーターまでが逆立ちで歩いていたので、びっくりしました。

お馴染みのへたくそな文字が並んでいた。

どうもこれは営業活動と関係なく配布しているハガキのようだった。またクビにされなければいいけれど、わたしは思った。

「ま、がんばって」とわたしは言った。

ハガキ職人は小さく頷き、またぞろもごもごと商品の宣伝文句を口の中で呟きながらその辺りをねり歩き始めた。まるで、二枚の大きなハガキにサンドイッチされているみたいだ、とわたしはその後ろ姿を見て思った。

ふと足元を見ると、何枚ものハガキが投げ捨てられていた。わたしはいたたまれない気分になる前にきびすを返し、雑踏の中に我が身を溶かしこんでしまった。

×××××

何ということもなく、また一年が終わろうとしていた。いつものことだった。あの「時間」という不気味な生き物は、わたしをいたずらに追い立てて、からかいながら並走し、いつの間にか追い越して、そして「べっかんこ」をしながら遠ざかって行ってしまう。ざるで砂を掬い上げるように、穴のあいた瓶にレモンのジュースを詰めるように、わたしは所在ないままで毎日を生きていた。わたしは思い出したように路面電車に乗ったり、環状線に乗ったりして時間をつぶした。それは気がめいるだけの遊びだったが、「常に動き続けている」という点において、なんだか意義深いことをしているような、そんな気になったのだ。

そんな折、わたしはトンボ眼鏡さんに一冊の文庫本をもらった。それは時代の潮流に押し流され、また、とてつもなく大きな力に突き動かされて没落してゆく、誇り高くも哀れな一族の歴史を丹念に描いた、非常に分厚い小説だった。その本はカバーも取れ、表紙も破れ、ぼろぼろになつていたものの、得体のしれない威厳を保ち続けていた。

トンボ眼鏡さんはその本を中華料理屋に置き忘れていた。次に彼が店に来た時、わたしはその本を「この前忘れて行きましたよ」と渡そうとしたのだが、「ああ、それもう読んじゃったから、あげるよ」と言われてしまった。そんなわけで、わたしはその本を手に入れたのだった。これはなかなか乙な暇つぶしになると、わたしは嬉しくなったものだ。

ところが、この本がちっとも読み進められない。バイトで手が空いた時、環状線に乗って街をぐるぐる回っている時、路面電車に揺られている時、土手に腰かけて風に吹かれている時、わたしがいつもは何をするでもなくぼんやりと過ごしている時間にその本を読もうと試みたのだが、うまくいかなかった。わたしの中に入って来たはずの活字は、すぐにぼろぼろとこぼれ出し、結局は流麗な文章の上をむなく目が滑って行くだけで、わたしは開いたページの上に立ち往生してしまうのだった。一冊の本も読めないうちに今年も終わってしまうのか、そう思うとやりきれない気分になった。

世間はクリスマスを前に浮足立っている。ビル街の一角にはにぎにぎしいツリーが立ち、派手なイルミネーションが都市の輪郭をふちどりつつあった。誰もが楽しげなふりをする、肌寒い季節がやって来た。そんなある夜、わたしは路傍に倒れているハガキ職人と出会ったのだった。

×××××

ハガキ職人は本拠地のドラッグストアから少しばかり離れた、ビルとビルの間の細い通路に倒れていた。そんなややこしいところに倒れているから、わたしが通りかかるまで誰にも気づかれず、見過ごされたままになっていたのだろう。それに一見したところでは彼の寝姿は、路上生活者が睡眠をとっているだけのようにも見えたのだ。

わたしにしたって、よくも気づけたものだと思う。虫が知らせた、としか言いようがない。わたしはバイトからの帰り道、くしゃくしゃの髪の毛を夜の空気ですれやしながら足早に歩いていた。わたしの周りには、着ぶくれた幸せそうな顔のにんげんたちがひしめいていた。たいていの不幸せは「なかったこと」にされ、のっぺりとした毎日の繰り返しが続いてゆくだけのように見えた。そしてわたしはその隙間にもぐりこみ、何するでもなく命を燃やしているより仕方がないの

だろう、そんな気分になせられる夜だった。

その時、何故か不吉な胸騒ぎがして、わたしは思わず足を止めた。後ろからやって来たカップルに肩がぶつかり、その二人は忌々しげな視線でわたしを見やって通り過ぎて行ったのだが、わたしはそんなことに構ってはいられなかった。すぐ脇の、ビルとビルの間の隙間に何かが転がっているのが見えたのだ。不審に思って目を凝らすと、それは人間で、しかもわたしのよく見知っている人間だったのだ。わたしが見誤らぬように、ご丁寧にもカンバンを二枚もぶらさげていた。

——脊椎の周りの神経が一斉に逆立つのを感じた。街の喧噪もざわめきも、はるか彼方に遠ざかって、わたしは真空の世界の真ん中に立ちつくしているかのような気分になった。他ならぬハガキ職人が、そこに横たわっていたのだった。

ハガキ職人はぶかぶかのサンタクロースの衣装に身をつつみ、頭には布で作ったトナカイの角をつけ、極彩色のポップ体で『クリスマス特別セール！』と大書きされたカンバンを背負い、ビルとビルの間に倒れ伏していた。それはかなしくなるくらいに滑稽な姿だった。そしてそんな彼の周りには、大量のハガキが散乱していた。ハガキに埋もれるようにして、彼は倒れ伏していたのだ。その様子はまるで、笑えないブラック・ジョークをわたしに投げかけてでもいるかのように見えた。

クリスマスケーキを買うなら、「チャボおばさん」のやっているケーキ屋の名物、ヘリウム・ケーキがおすすめですよ。ケーキの中にたつぷりヘリウムガスが入っていて、食べると空を飛べるのです。「チャボおばさん」は、このヘリウム・ケーキの名人なのです。

わたしはつんのめるようにして彼に駆け寄った。悪寒のせいだろうか、彼の体は不規則にぶるぶると痙攣していた。その手は氷のように冷たくて、真っ青な唇からもれ出している吐息はやけどしそうなほどに熱かった。

「何やってるの、こんなところで！」彼の肩を揺さぶりながら、わたしはそう叫んだ。そんな風に大声を出したのは、何年ぶりのことだろうか。彼は壊れた人形のようにぐにやぐにやと四肢を揺らし、わたしはくらげとでも格闘しているかのような気分になった。

「寝てる」と彼は答えた。「すごく頭痛いから、あんまり揺さぶらんといて」

「熱は——」わたしは彼の額に掌を押し当てた。

「手袋とらなきゃ分かんないだろ」息も絶え絶えに、彼はそう言った。わたしは手袋を放り捨て、素手で彼の額に触れた——それはまるで、たまごを落とす直前のフライパンのようだった。

「めちやくちやに熱いよ」とわたしは言った。「とにかくこんなところで伸びてちゃいけない、早く帰って寝なさい、あんた家どこよ！」

ハガキ職人は口の中で何事かもごごとつぶやいている。埒が明かないので、わたしは彼を担ぎ上げて立たせ、「連れて帰ってやるから、案内しなさい」と言った。

「ごめん」とハガキ職人は言って、わたしの首筋に顔を押し付けて来る。熱風のような吐息が、わたしの頬にかかった。そのうちに、空から何か白くて小さなものが落ちかかってきて、わたしの赤茶けてくしゃくしゃの髪の毛のそこかしこに引っかかった。雪が降ってきたのだった。

×××××

ハガキ職人の部屋は、高層マンションの一角にある 2LDK だった。(率直に言って、わたしの住まいよりもずっとよさそうな部屋だった)。よく片づけられた清潔な部屋だったが、言い方を変えれば殺風景で、生活のにおいというものが極端に希薄だった。テーブルの上に転がっているハガキと色ペンだけが、辛うじて彼のおいを留めていた。

わたしがハガキ職人を担ぎこんだ時には、部屋の中には誰もいなかった。「二両親は？」「今よそにいる」とハガキ職人は咳の合間に答えた。

とりあえず、わたしはハガキ職人を布団に寝かせ、ストーブをたいた。かじかんだ手をストーブの上にかざしていると、痺れのような痛みが肩の上に残っていることに気づいた。水で冷やしたタオルを彼の額に乗せた後、一応親に連絡させた方がいいだろう、と思い、彼に電話機を渡すと、

「別に連絡なんてしなくていいよ」と、静かな声で言う。

「なんで」

「親は日本にいないよ。シスコにいるんだよ」

わたしが不思議そうな顔つきで黙っていると、彼は火照った顔でこつちを見ながら言った。「シスコだよ、サンフランシスコ」

なるほど、サンフランシスコか。わたしは分かったような顔をして頷いた。と言っても、わたしはサンフランシスコに行ったことはないし、そこがどんな場所なのかもよく知らない。とにかくその時わたしは初めて、ハガキ職人の親御さんはサンフランシスコで仕事をしており、彼は一人日本に残されて一人暮らしをしていたのだ、と知った。

×××××

翌日わたしはバイトを休み、彼に付き添って病院に行った。

A 型だね、でっぷりと肥った初老の医者はどうやってタミフルを処方した。どこでうつされたんだろう、誰がうつしやがった、青白さと通り越して真っ白くなった顔で、彼はぶつぶつと独り言をもらしていた。お姉さんにうつさないよう気をつけな、そうやって医者はハガキ職人の顔にマスクを掛けた。お姉さん……わたしは思わず噴き出しそうになった。

「牛肉でも食べる？」帰り道、わたしはハガキ職人にそう尋ねた。

「食欲ない」あきらかにサイズの大きすぎるマスクの向うから、彼はそう答えた。

部屋に戻ってから、わたしは小さな土鍋で卵のお粥を作って彼に食べさせた。彼は神経質な顔つきでチリレンゲを口に差し入れ、「独特の味だね」と控えめな感想を述べた。なぜお米と卵としようゆだけで味が独特になってしまうのか、わたしにも分からない。

けれども、彼は食欲ない、食欲ない、独特だね、などと繰り返しつつも、そのお粥をべろりとたいらげてしまった。あまつさえ、お代わりを要求した——それも、碗ではなく、お鍋で。

「あとはタミフル飲んで、ゆっくり休みな」わたしは伸びをひとつして、鍋を洗いに台所へ向かった。

「年末なのに」とハガキ職人。「うっとうしいことになった」いつも通りの無愛想な口調だが、どこなく憂いを帯びた声だった。大方、正月に向けて年賀ハガキを書きまくるつもりでもいたのだろう。

×××××

それから一、二週間くらいに渡って、わたしはハガキ職人の部屋を折に触れて訪れた。バイト帰りにぶらりと立ち寄って様子を見たり、あるいは、彼から「しんどくてご飯の準備ができないから、お粥作りに来て、あの独特のお粥」と要請されて足を運んだり——。思ったよりも彼の風邪は長引いていて、おくびにも出さないけれど彼が心細がっていることは火を見るよりも明らかだった。それにしても、ひとの作ったお粥を「独特」と称するのは、ばかにしているのか、賞賛しているのか、判然としないから困る（かつて、彼のサンドイッチマン姿を笑ったことへの意趣返しなのだろうか）。

やや意外に感じたのは、彼が自宅によく音楽を聴いているということだった。彼の枕元にはレンタルショップで借りてきたらしいCDが山と積んであり、彼のパソコンからはわたしの聞いたことのない不思議な歌がこぼれ出しているのだった。

「ジェファースン・エアプレイン、ヴェルヴェト・アンダーグラウンド、シド・バレット、キング・クリムゾン……」わたしはCDの山に手を伸ばし、わたしにとっては未知のバンドの名前を読み上げてみる。

「全部、六〇七十年代の音楽だよ」布団にくるまったままのハガキ職人は、そう返答する。

「そんな昔の音楽聴いているの」

「たかだか三十年か四十年前の話じゃん」そう言って彼は寝返りを打つ。

「たかだか——確かに、「たかだか」なのかもしれない、宇宙の歴史と対比させてみれば。」

わたしは首をねじり、パソコンのスピーカーから流れて来る曲に耳をそばだててみる。奇妙な具合に歪んだギターに導かれるようにして、まるで海の底で録音したかのように深いエコーのかった声が歌い始める。この曲を聴くのは、もう何度目かになるはずだ。初めて耳にした時は「ぶきみな歌」というくらいの印象しかなかったのだが、だんだんとわたしはその「ぶきみな歌」に身体を蝕まれつつあるのだった。口当たりの良い食べものよりも、ある種の不味さを孕んでいる嗜好品の方が中毒性がある。そういうものだ。

「これ、いいね」とわたしは言った。

『『Corn Flake Blues』』彼は即答した。『The Rice Fields』というバンドのデビュー曲。ビルボードで十二位だよ」

「へえ」

「六十七年にイギリスでデビューしたサイケデリックロックのバンドだよ。後期ビートルズに影響を受けて、音作りなんかは割とポップなんだけど、ファースト・アルバムには十分超える長尺の曲なんかも入ってて、プログレの走りみたいな雰囲気があるよね。アルバム三枚出して解散しちゃったんだけど、もっと活動しておけば歴史に残るバンドになったかもしれない」

「サイケデリック？プログレって何？」わたしは首を傾げる。——彼がこれほど長いセンテンスを喋っていることに、ひそかに驚きながら。実際わたしはひどく驚いたものだ、彼がそんなに雄弁に話すのを、初めて聞いたので。

「そういう種類の音楽があるんだよ」彼はせき込みながら起き上り、CDの山を物色し始めた。「聴けば分る」

わたしはその後ろ姿を見やる——彼がめつたにない積極性を見せていることに、ひそかに驚きながら。本当は、安静に寝ておきなさいと注意すべきだったのだろうが、わたしはそうしなかった。そして、火照った顔でCDを物色する彼を、黙って眺めていた。

お粥を食べ終えたハガキ職人とわたしは、けだるい午後をぼんやりとした気分で過ごしたものだ。ハガキ職人は少し体力が回復すると、仰向けになってハガキを手に取り、執筆を再開した。

今日の空はひどいオレンジ色です。コップですくえば、オレンジジュースが飲めることでしょう。

わたしはそんな彼を「大人しく寝てな」とたしなめながら——本気でたしなめているわけではない、わたしだって子供の頃に風邪をひいた時には、病床で本を呼んだり絵を描いたりして遊ぶのが常だった——部屋を流れるロックンロールに耳を傾けていた。

だっ広い世界の隅にぼつねんと腰をおろして、わたしたちは摩訶不思議な音楽を聴いている。この時間の流れの中では、黙りこむのも、言葉を交わすのも、ほとんど同じようなことだ。それは本当に静かな午後だった。騒々しいロックンロールほど、静かな音楽はない。わたしはぼんやりとした気分のままで本を読み、彼は横たわったままハガキを書き、二人して歪んだギターと騒々しいシンバルのお喋りに耳をそばだてている。

「大人しく寝てな」

「おう」

わたしは本を閉じ、立ち上がる。ハガキ職人に飲ませるジュースを作るため、りんごをすりにゆくのだ。ハガキ職人はペンを置き、上気した顔でため息をついて枕に顔をうずめる。わたしがりんごをすりおろす音が、ロックンロールのリズムと混ざり合ってアンサンブルを奏でている。

ハガキ職人は一日に一回、シスコに住む親宛てに近況報告のメールを送るのを日課としていた。この習慣は別に彼が好きで続けているわけではなく、親によって義務付けられた儀礼なのだそう。まったくこの子の親は、放任主義なのか、それともわが子を気にかけているのか、よく分からない人たちだ、とわたしは思った。ハガキ職人はその面倒くさい作業を、恐ろしく手際よく、短時間でこなしていた。寝床にパソコンを持ち込み、ものの五分もしないうちに見事なメールを一本書き上げるのだ。ちょうど風邪薬を決まった時間に規則正しく服用するように、かれはその仕事をきつちりと済ませるのだった。「ハガキ職人」が「メール職人」になっている、とわたしは思ったものだ。

彼は肩をすくめた。「正月、帰らないんだとさ」そしてパソコンを枕元に置き、首元に毛布を引き寄せた。

わたしも肩をすくめ、彼が食べ散らかしたお粥の鍋を台所へ運んだ。

×××××

わたしは The Rice Fields の CD——『Corn Flake Blues』が入っているシングル集と、ハガ

キ職人が一番好きだという三枚目のアルバムを借りて来た。

シングル集のジャケットには、デビュー当時のスナップ・ショットなのだろう、胡散臭い愛想笑を浮かべたマツシユルム・カットの若者たち五人が映っていた。何となく、その時の彼らには爬虫類のような雰囲気があった。

三枚目のアルバムのジャケットに映っている彼らは、髪も髭も伸ばし放題で、まるで別人のような面構えになっていた。今度は爬虫類というよりは、類人猿の雰囲気だった。

わたしはCDをセットし、再生ボタンを押す。とたんに、古めかしいサイケ・ポップが流れ始める。こうして、うすら寒い隙間風に満ちていたわたしの部屋は、奇妙なエフェクトのかかったボーカルと、懐かしい歪み方をしているギターの音によって、いくらか賑やかになった。

ぼくはきみを待っているのさ

あごひげも伸ばし放題

待ちくたびれて 焦がれるあまり

空に向かって逆立っている

きみは問題をかかえている

きみは治療薬を探している

ぼくはギターを投げ出して

その問題をときほぐしている

コーンフレークの皿の中で

きみと追いかけてっこをしたい

きみを上手く捕まえられたら

ぼくは何をもらえるのかな

コーンフレークの皿の中で

ぼくはずっと ぐるぐる回るよ

きみはぼくの腕をすり抜け

まぼろしみたいに消えてしまった

(訳詞 那賀川吾郎)

The Rice Fields についてウィキペディアで調べてみたけれど、目ぼしい記事は載っていないかった。メンバーの消息も、あまりはつきりとしたことは分からなかった。リーダーだった元メンバー(担当楽器はオルガンだ)の非公式ファンサイトを見つけたが、それも一九九八年で更新が止まっていた。それによれば、何でも彼は七〇年代をセッション・ミュージシャンとして過ごし、八〇年代中ごろに「復帰作」としてソロ・アルバムを一枚出したのだという。九十年代初頭には、自分以外のメンバーを一新して The Rice Fields を再結成し、ライブアルバムを出したそうだが、しかし今現在はどこにいるかは分からないし、そのソロ・アルバムも再結成アルバムも、とつく

に廃盤になっていることだろう。彼は自分の過去の作品を、今でも聴き直してみるものがあるのだろうか。それともさっぱり忘れ去って、淡々と日々を過ごしているのだろうか。

『Corn Flake Blue』は、彼らの最初のシングルで、一番ヒットした曲だそうだ。ハガキ職人はチャートの十二位をとったと言っているけれど、わたしが調べたところでは四十位止まりとなっていた。歌詞の中に「薬」という単語が出てくるところから、ドラッグ・ソングだと一般的に思われているふしがあるそうだ。

コーンフレークの皿の中で  
きみと追いかけてっこをしたい  
きみを上手く捕まえられたら  
ぼくは何をもらえるのかな

コーンフレークの皿の中で  
ぼくはずっと ぐるぐる回るよ  
きみはぼくの腕をすり抜け  
まぼろしみたいに消えてしまった

なんだか、ハガキ職人がハガキに書きそうな文言だな——わたしは歌詞カードを眺めながら、そんなことを思う。彼はこの歌を聴きながら、もしくは頭の中で口ずさみながら、黙々とハガキを書いたりするのだろうか。

×××××

やがて、ひどく呆気なく年が暮れ、そして年が明けた。わたしにとっては大晦日もお正月も、ただのありふれた冬の日、という印象しかなかった。わたしは年越しソバを食べることもなく布団に入り、除夜の鐘は眠りの中で聞いた。そしてわたしの知らない場所で初日の出が見られ、目を覚ました時には新しい年になっていた。わたしは首をかしげたものだ。昨日となにも変わらない今日が来ただけのように思えて仕方がなかった。ところが「新年」という得体の知れない何者かが生活の中に潜り込んできて、意味もなく落ち着かないような、わけのわからない気分させるのだ。困ったものだ、とわたしは肩をすくめる。

さて、「新年」の挨拶にでも行ってやるか。わたしは赤茶けてくしゃくしゃの髪の毛を無造作に束ねると、ベージュ色のカーディガンを羽織って表へ出た。

「あけましておめでとう」

ドアがわずかに開く。チェーン・ロックの向うに、いくらか顔色のよくなったハガキ職人が立っていた。

「おめでとう」

「体調は？」

「だいぶまし」相変わらずの素っ気なさで、彼はそう言った。

「おめでとう」

「ありがとう」ハガキ職人は首をひっこめ、チェーンを外した。「入ってよ」

玄関に足を踏み入れると、トマトケチャップのにおいが漂って来た。

「もう昼ご飯食べた？」と、ハガキ職人。

「まだ」

「じゃあ、ちようどいい」

ハガキ職人はPCを起動し、『Corn Flake Blues』を再生する。おなじみの、乾いたギターが絡み合うイントロが流れ始める。実を言うとなたしは最近この曲を何十回となく聴いていて、正直な話そろそろ飽き始めていたところなのだが、せっかくの彼の好意を無下に断るのも何なので、大人しくそれに耳を傾けていた。深いエコーのかかったボーカルが第一声を発すると、彼は満足げな顔つきをして台所に向かった。

そして、「久しぶりに自炊してみた」と言いながら、ハガキ職人は湯気立つ皿を二枚持って戻って来た。

「ナポリタン」皿の上でソーセージといっしょにのたくっている真っ赤なスパゲッティを見て、わたしはそう言った。

「食べてみなよ」そう言って彼は、どっかりと腰を下ろす。お粥のお礼、というわけなのだろうか――わたしはフォークを手に取り、こんもりとした麺の山の中腹に突き刺した。

そしてわたしたちは差向いで、古めかしくも懐かしいロックンロールを聴きながら、ナポリタンをすすりこんだ。年越しソバも食べずに年明けスパか、と思うと、おかしくなった。

くだんのナポリタンは、少しばかりトマトケチャップの量が多すぎる点をのぞいては、まあまあ美味しいと言える出来だった。わたしは唇の端についた赤いソースを指先でぬぐいながら、そこはかとな懐かしさと哀しさの入り混じった奇妙な気分になっていた。ナポリタンほどノスタルジックな食べ物はないと思う。

「どう？」と、口の周りを真っ赤にしてハガキ職人は問う。

「独特ねえ」ここぞとばかりにわたしはこのセリフを使ってみたものの、今思い返せば悪ふざけが過ぎたかもしれない。

食べ終えて、わたしがぼんやりとテレビを見ていると、ハガキ職人はテーブルの上に山と積まれたハガキの山から一枚を抜き取り、「年賀状だよ」と言ってわたしに手渡した。

あけましておめでとう。本年もよろしく。赤道直下、南太平洋の孤島にて。

追伸、ここでは水のかわりにヤシ酒を飲みます。

わたしは周りを見回したが、そこにはヤシの木一本生えていない 2LDK の部屋があるだけだった。

「それから、これ」と言って、さらに彼はコンビニの袋を差し出して来る。中を見てみれば、「500」や「100」や「10」などとマジックペンで書いてある牛乳瓶の蓋、コーラの瓶の蓋、ペットボトルの蓋がぎっしりと詰まっていた。

「これは？」

「お年玉」彼はこともなげに言った。

家に帰ってから数えてみると、それは全部で二万五千三十六円分（？）あった。ウイルス性の倦怠感にまどわりつかれながら、布団の中で空き瓶の蓋に一生懸命数字を書いているハガキ職人の姿を想像して、わたしはなんとも奇妙な気分になったのだった。

×××××

そんなこんなで、わたしたちはそれぞれの日常に回帰したのだった。正月休みを終えて営業を再開した中華料理屋にて、わたしは冬休み明けの呆けた大学生たちのために脂っこい皿を運んでいた。ハガキ職人はまた以前のように、大きなカンバンに挟まれながら街頭に立つようになった。そしてわたしたちは時たま、呆けた顔つきで、土手の上で出会うのだった。

不安定な天気の日が続く冬のことだった。わたしたちは虚脱しきっていた。霜に焼かれた雑草が弱弱しく生い茂っている、くすんだ色の土手の斜面に腰掛けて、そこから目に映るものを何をすることもなく眺めていたのだ。さまざまな高さのビルディングや、色々な色で彩られた屋根の連なりによって組み立てられた街、ほんとうはカラフルな風景なのに曇天のせいで灰色一色に染まってしまった街を、うねうねと曲がりくねりながら流れる川が分断していた。川はひねくれた曲線を描きながら、そのまま空も分断し、風も分断し、しまいにわたしたちまでを分断して、なにもかも四散してしまうのかもしれない。しかし、少なくとも眼に映る限りでは、均衡は保たれているようだった。

「寒いねえ」わたしは両手をこすり合わせ、息を吹きかける。

「たいしたことないよ」そう言って、ハガキ職人は大きくしゃみをした。

×××××

「ねえさんは友だちとかっている？」

ある時、ハガキ職人がそんな質問を投げかけて来たのを覚えている。

「ま、あんとかね」わたしはそう答えた。

「からかうのはやめ」素っ気ない声で、ハガキ職人はそう言い返す。

「からかってなんかないよ」わたしは苦笑いをした。本心だった。

川の水面から吹いてくる風が、わたしたちの顔を撫でて行った。朝の水道水のように、それは冷たかった。

「わたしにはあんまり友だちがないのさ。おまけに、昔いちばん仲のよかった友だちはこの街を出て行ってしまったよ」わたしは伸びをしながら、そう言った。

「どんな人だったの？」

「彼はエカキだったね」

「彼？」とハガキ職人は、ハガキを書く手を止めて問い返す。「男の人なの？」

「うん。訳の分からない男だった」とわたし。「一枚の絵も描いていないけど、絵描きを名乗っていたよ」

そう、彼はエカキだったが、一枚の絵も描かなかった。描かなかったと言うより、描けなかった、と言った方が正しいだろう。

もともと彼は小説書きで、すばらしい短編小説——野心的なカツラ職人と、愛鳥家の株屋との精神的な交流を淡々と描いた、叙情的な物語——をものにしたこともある。今となつては、それが彼にとって幸せなことだったのか、そうではなかったのか、誰にも分からない。と言うのも、その作品を同人誌に発表した後は、彼は一編の小説も書き上げられぬまま何年間も過ごしたのだ。そしてとうとう、彼は小説執筆を断念し、画家に転身した。散文に見切りをつけ、絵筆によって何かを成し遂げようと一念発起したのだ。しかし、結果的には状況は何一つ変わらなかった。原稿用紙の前で項垂れる日々が、カンバスの前で項垂れる日々になっただけだった。

ある朝、彼はぶらりと部屋を出て、そのまま帰って来なかった。魔法のランプのような食器のイラストがプリントされたお気に入りのTシャツを着て、彼はどこかに行ってしまった。彼の住んでいたアパートの屋上には、一枚のカンバスが残されていた。それは早朝の街をスケッチしようとした彼が運び上げたものだった。カンバスは、真っ白いまま置き去られていた。彼がどこに行ったのか、知る人はいない。

「その人とぼくはよく似ている」話し終えたわたしが口をつぐむと、ハガキ職人はそうつぶやいた。

「そう？あんたは、書く（描く）ことには不自由していないようにだけど」

「描けもしない絵を描こうとして何もできないのも、どこにも届きやしないハガキを書き続けているのも、同じようなもんだよ」そう言つて彼は黙り込んだ。

「ま、たしかにそうなのかもね」とわたしは言い、空中に白い息のかたまりを浮かべた。

書けもしない絵を描こうとして何もできないのも、どこにも届きやしないハガキを書き続けているのも、同じようなもんだ——か。言わせてもらえば、わたしだってそれと似たようなものだ——胸中にて、そつとつぶやいてみる。結局のところみんなそうなんだと思う。そんな不毛な営みの数々が、ネジのはずれた歯車のように、噛み合ったり、噛み合わなかったりしながら回転し続けている、そうやってこの地球は今日も回っているのだらうと思う。わたしは曇天模様の空の下に広がる街を俯瞰してみる。そうしていると何だかこの街が、真っ白いカンバスや、ほら話が走り書きされたハガキに埋もれている情景が見えて来るような気がした。

×××××

このうすら寒い街にも、春の予感が漂い始めた。それは生き物として喜ぶべきことなのに、わたしはなぜか寂寞とした思いばかりがお腹の中に湧き上がって来るのを感じていた。なぜなのだろう、このみじめたらしくて陰鬱な冬が終わるというのに、やけにもの悲しい気分になつてしまふのは。そんな気分の中で過ごしていたある日のこと、ハガキ職人が唐突に「明日、街を出る」と言い出したのだった。

「転校するから、引越すんだ」と彼は言った。「だから、今日でお別れだよ」

「そう」あまりに唐突すぎて、わたしは戸惑いを覚える余裕すらなかった。

ハガキ職人は、必要事項は伝え終えたという顔つきで口を閉じ、わたしもまた黙り込んだまま

膝を抱えていた。この素っ気ない少年が遠くに行ってしまうという事実を、わたしはまだよく理解出来ずにいた。かつて友だちのエカキが去って行ってしまったように、この少年もいなくなってしまうのか――？一体、それはどういうことなのだろう。この倦怠と茫洋の日々から、ハガキ職人が忽然と姿を消す。わたしがそれがどのような出来事なのか、まったく理解出来なかったのだった。

「サンフランシスコに行くの？」ずいぶん時間が経ってから、わたしはそんな質問をした。

「あいにくそうじゃないんだ」ハガキ職人は簡潔に答えた。

「じゃあ、どこ？」

「どこだろうと、退屈な場所だと思うよ」

「ふうん」とわたしは頷いた。それ以上聞いても、仕方がなさそうだった。

そしまたわたしたちは黙り込んだ。耳をすませば、街の喧噪、列車の足音、風の忍び笑う声、そんなあれこれが聞こえて来るものだと思っていた。しかし耳をすませばすますほど、そうした音の断片はあつてなく遠ざかって行き、つかみどころなく四散してしまうのだった。四散してしまえば、わたしたちは静けさの中に取り残され、自分の息づかいに耳を傾けているより仕方がないのだった。しばらく経ってから、ハガキ職人が立ち上がった。

「引越しの準備をしに帰らなくちゃならない」ハガキ職人はそう言って、ズボンについた草の切れはしと露を払いのけた。「さよなら」

「お別れの記念に、ハガキをちょうだい」わたしは川の水面を眺めながら言った。

「ごめん。今日はハガキ、持って来なかった」ハガキ職人はそう言った。そういうものだやな、とわたしは胸の中でそっと呟く。いつだって、ここぞという時に何かが欠けてしまうようになっていくのだ。

「じゃあ転居先から送ってちょうだいよ」

「さあ、気が向いたらね」ハガキ職人は素っ気なく答える。

「きつとよ」

「気が向けばね」

ハガキ職人は土手の上を歩き始める。わたしはその後ろ姿に向かって声を投げた。

「さよなら、ハガキ職人」

彼は怪訝そうな顔で振り返った。

「何それ」

「あなたのあだ名」わたしはそう言った。心の中では彼のことをずっとそう呼んで来たのだが、面と向かってその名で呼びかけるのは初めてのことだった。

「そりやどうも」とんちんかんな返事をして、彼は手を小さく振って見せた。そして踵を返すとまた歩き出し、わたしの視界から徐々に遠ざかって行った。

そんなわけで、ハガキ職人は行ってしまった。

すべては唐突に始まり、そして唐突に終わってしまう、のろまなわたしにはどうすることも出来ないままに、この得体のしれない世界は動き続けている。どうすることもできないのだ、わたしは川の水面から吹いて来る風に髪の毛を遊ばせながら、そんなことを感じていた。赤茶けてくしゃくしゃの髪の毛は空中でばらけ、翻った。あまりにも平凡な早春の午後が、そこに残されて

いるだけだった。

さて、とわたしは呟く。環状線に乗って、ぐるぐるしに行くか。それとも路面電車に乗って、時間をつぶそうか。選択肢を決めかねて、わたしは土手に座り込んだまま、ほの明るい空を見ているのだった。

×××××

「春めいてきましたねえ」

遊び人が、トンボ眼鏡さんにそう話しかけているのが聞こえた。スポーツ新聞を読んでいるトンボさんは適当に頷いて見せながら、「ああ、春だね」と返事する。わたしはお冷（と言う名の、なまぬるい水）のコップを二つ携えて、彼らのテーブルに歩み寄った。

「春が来ましたね」遊び人が、今度はわたしに話しかけてきた。

「そうですね」と、わたしは答えた。「来なけりやいいのに」

「そういうわけにもいかないんだよね」スポーツ新聞に目を落としたまま、トンボ眼鏡さんが言った。

その通りだな、わたしはお冷のコップを彼らの前に置きながら、胸の中で思った。そういうわけにも、いかないんだ。

「注文いいかな」と遊び人。

「どうぞ」

「じゃ、八宝菜定食ひとつ！」

「僕は坦々麺セットの、おかずがイカリングの方ね」トンボ眼鏡さんは乱雑に新聞を折りたたみ、カバンに押し込んだ。「で、大盛りね」

「ライスですか？ 麺ですか？」

「両方にしたら何円増し？」

「三百円増しです」

「じゃ、ライスの方のみ大盛りね」

「あ、じゃあ俺もライス大盛りで」と遊び人が口を挟んだ。

本当によく食べる人たちだ、とわたしは顔は無表情のまま、しかし心の中で笑いながら、厨房に注文を伝えた。

そしてわたしはカウンター席に腰掛け、イヤホンに耳に突っ込む。最近わたしはまたぞろ **The Rice Fields** にはまっているのだ。わたしの中に沈殿していた音のカケラが発酵でもしたのだろうか、前に聴いていた時よりもずっと素敵に聞こえた。

ぼくはきみを待っているのさ

あゝひげも伸ばし放題

待ちくたびれて 焦がれるあまり

空に向かって逆立っている……

「赤茶毛さん、なに聴いてるの？」遊び人がそう尋ねる。

「昔の歌」わたしはそう答えた。

×××××

そして春が来た。

ハガキ職人とは音信不通だ。彼は「まだ」ハガキを寄越して来ない。最初から出していないのかもしれないし、出したものの届き損ねているのかもしれない。いずれにせよ、確かめるすべもないのだ。彼の転居先は聞きそびれてしまったし、わたしの方から行動を起こすことは出来ない。それなのに、わたしは驚くぐらい楽天的な気持でいる。いつかきっと、彼は何らかの形でわたしに便りをくれるだろう、そんな風に本気で信じているのだ。あの出鱈目なホラ吹き少年を信用するなんて、わたしもよほど変わっている、と自分でも可笑しくなってしまう。

生あたたかい天気の日が続く春先のことだった。わたしは一人ぼつねんと土手に座りこんでいた。息を吹き返した雑草が喜び勇んで生い茂っている、みどり色の土手の斜面に腰掛けて、そこから目に映るものを何をするでもなく眺めていたのだ。さまざまな高さのビルディングや、色々な色で彩られた屋根の連なりによって組み立てられた街、うさんくさいような青空の下に広がるカラフルな街を、うねうねと曲がりくねりながら流れる川が分断していた。川はひねくれた曲線を描きながら、そのまま空も分断し、風も分断し、しまいにわたしまでを分断して、なにもかも四散してしまうのかもしれない。しかし、少なくとも眼に映る限りでは、均衡は保たれているようだった。その摩訶不思議な均衡の上で、わたしはまんじりともせず土手に座りこんでいた。そうしているうち、この土手から見渡せる空の一角にオーロラが見えるのを、他に何をするでもなく待っている自分に気がついたのだった。